
人肉のお味

文屋カノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人肉のお味

【Nコード】

N6627T

【作者名】

文屋カノン

【あらすじ】

人肉は美味いか不味いかの論議を客と交わしていたホステス幸子は、指名客のテーブルに呼ばれ注意される。

その愚痴を元恋人に語ると、彼は客を馬鹿にしながらくスリをキめ、幸子と性交に及ぼうとする。

幸子はその、いつもの行為を受け入れるが……。

(前書き)

R18にしようかと一瞬迷いました。ちょっと変態的なので。

第105回文学界新人賞に応募したものを加筆訂正したものです。4年前にはこんな攻撃的なものを書いていたのかと、読み返して驚きました。

でも私の集大成のようにも思います。またこういうの書こうかな。

「でもあたしは人肉って、不味いと思うけど」

と反論しながらホステスは、白く長い腕を伸ばし、傍らの客のグラスを引き寄せた。一時間分のセット料金に含まれた安物の焼酎で作られた水割りには、まだグラスに半分程残っていたが、ホステスは機械的にグラスを持ち上げると、おしぼりを取って、まずグラスに附着した水滴を拭った。

「いや俺の友達のじいちゃんが言ってたんだって。人肉っていうのは、メチャクチャ美味しいんだって」

グラスを取り上げられたその男は、やはりセット料金に含まれたお通しのポテトチップを、芋虫の様にずんぐりとした指でつまみながら答えた。

業務の合理化を図るボーイ達が、開店と同時に複数の大皿に盛り分けた後、ラップ無しでカウンターに放置するそのポテトチップは、大抵客の口に運ばれる頃にはしけり始めていた。しかし興奮していた男の熱が湿気を飛ばしてもしたのか、別段文句を言うでもなく、男はやや突き出た歯で、モシャモシャと噛み砕いた。

「何で？ その人、人肉食べたの？」

「それは知らねえ」

「食べてないんなら、美味しいなんて言えるはず無いじゃん」

ビームスのバーゲンで購入した、幅広なプレスレットをぶら下げた右手で、グラスに氷を投入しつつホステスが異を唱えた。続いて対面に座っていた中国人ホステスが、ロレックスのコピーが巻きついた左手で安物の焼酎を掴み、そのグラスに注ぎ足した。その透明の液体は、いつもよりかなり多目にグラスに落下した。

「だったら君だって人肉が不味いとは言えないじゃん。食ったこと無いだろ？」

油で汚れた指をおしぼりに擦り付けながら、男はホステスをいな

した。純白のおしぼりには男の指の形そのままに、茶色いシミがくつきりと付着した。

「でもあたし前に何かで読んだもん。人間って自分より遠い生き物を、美味しく感じるようにできてるんだってよ。じゃないと消化が困るんだって」

いつもよりかなり多量の焼酎が注がれたグラスに水を加えながら、ホステスがそう言いかけると、中国人ホステスの隣に座っていた眼鏡の男が、ほうという顔をして、ホステスの利かん気の強そうな瞳に目をやった。つられて中国人ホステスも、発言の続きを促すかのように、目の前の日本人ホステスに視線を向けた。

その流れに力を得たホステスは、マドラーをグラスに差し入れると、やや力強くそれを回転させ

「人間は食べた物消化するけど、でも自分の胃とか内臓は消化しないでしょう？ 人の体は、自分の体から遠いDNAを持った物を消化するようにできてるんだって。人間同士はDNAが似てるから、仮に体内に入ったところで、消化機能がストップするから消化できないんだって。消化できないってことは人間にふさわしくないってことだから、人間の味覚はそれを美味しく感じない構造になってるんじゃない？ だからあたし達は、人から遠い動物の肉とか、蟹とかウニとかが好きじゃん」

と言うとマドラーを引き抜き、グラスを隣の男の前にコトンと置いた。グラスの中身は回転の余波でまだ渦が巻いていたが、男は渦の消滅を待たぬままグラスに口を付けた。そして

「でも人間って、猿の脳味噌とかも食うよね？」

と小馬鹿にした様な目でホステスを見た。その発言を聞いた眼鏡の男は、神経質そうな顔立ちに、ふと不快な色を浮かべた。

ホステスは眼鏡の男の表情に気付かないまま

「そりゃあ中国の奥地とかでは昔食べたらしいけど、でもそれって珍味でしょ？ 珍味必ずしも美味ならざりきでしょ。美味しければもつと流通して、普通にスーパーとかで売ってるはずだよ。」

人間に近い猿の肉が不味いつていう証拠じゃん」

と逆らった。今度は中国人ホステスがその派手な顔立ちを曇らせ
たが、やはりホステスは気付かなかった。そしてホステスの隣の人
肉美味論者も気付かなかった。気付かないまま男は

「違つよ。常識に縛られてんだよ。人肉が美味しいはずないつて思
い込んでるんだよ」

と断言すると胸ポケットを探り、マイルドセブンを取り出した。

「違つて。消化できないからだつて」

客の煙草に火を点けてやる事も忘れて、ホステスが小さく叫んだ
その時、ボーイがスツと現れ

「サチ、十番、指名」

とホステスに耳打ちした。ホステスは面白くなさそうな表情のま
ま、ハンカチと店の名入りのライターを手提げ型のポーチにしま
うと、客たちとグラスを合わせながら、「ご馳走様でした」と尖った
声を出した。

「さっちゃん、あれ力入れすぎだつて。頑張る方向間違つてるつて」
傍らに座ったホステスが作った少し薄目の水割りでの乾杯を終え
た後、指名客はおもむろにセブンスターを口にくわえ、ホステスを
諭し始めた。

「え、聞こえてた？」

「俺、耳いいもん」

「だってあの人、人肉が美味いとか言うんだよ。しかも……」

興奮冷めやらぬ様子で、ホステスが訴えかけると、指名客は口に
くわえたセブンスターを一旦口元から離し、反対の手の人差し指を
口元に当て小さく「シッ」とたしなめた。そして改めてセブस्ता

「をくわえ直し、ホステスの差し出したライターの火に、セブンスターの先端を押し当て

「そんな客の言ってくる話にいちいち熱くなつてどうすんの。身が持たないよ。一見の客かも知れないのにさあ」

とつぶやきつつ、煙を吐き出した。

ホステスはその煙の行方を追いながら、今の発言の意味を真剣に考えた。しかしホステスには指名客の言わんとする事が半分も理解出来なかった。そのためホステスは

「別にあたし、特に頑張つてもいないんだけど」

とげんな顔をしながら、自分の手元に視線を落としたり

このブレスレットが二つ店頭で並んでいるのを見かけた時、とても可愛いと思つた。よく見ると布で作られたブレスレットには、それぞれ別のアルファベットが、キラキラと輝くラインストーンと共に縫い付けられていた。一つは「milk」。もう一つは「salt」。一体どちらにしようかとホステスはしばし悩んだものだった。「頑張つてるじゃん。あんなしょうもない客真剣に相手してさあ。でもしょうもない客と真剣な会話して指名が増える？ 増えないでしょ？ ああゆう客は適当にあしらつとけばいいんだよ。そんで力温存しといて、その力を指名取れそうな別の客に振り分ければいいんだよ」

おおよそ夜の飲み屋には不似合いな見栄えのしない短軀を、何の変哲も無いパーカーとジーンズで包みながら、指名客は訳知り顔でホステスを指導した。指名客はこの、かろうじて美人の部類には引つかかっているものの、およそ水商売向きではないホステスの不器用さを、呆れながら気に入っていた。

「適当にあしらうつて、どうすればいいの？」

「飲み屋の客となんか、もつと緩い会話すればいいんだよ。『歳幾つなのー？』とか、『宝くじが当たつたら何に使うー？』とかさ」

「末永すえながさんは、宝くじ当たつたら何に使うの？」

指名客が自分と同じ二十六歳である事を知っているホステスは、

そう尋ねながら、指名客の腫れぼったい一重の目を覗き込んだ。「不器用で見えてもらえない」と、敢えて年かさの自分を指名し、時折客らしからぬアドバイスを伝授するこの変わり者は、あぶく銭をどの様に使うのだろう？と　ホステスは興味を持った。

指名客はふつと視線を遠くに投げると素早くそれを目の前のホステスに戻し、そして

「そうだなあ。毎晩ここに通ってさっちゃん指名するかな。オープンからクローズまで毎晩いたとして、三億あればどれくらい通えるかなあ？」

と笑いかけた。けれどホステスは、その発言の前に指名客が投げた視線の行き先を知っていた。そのためホステスは

「そうだねえ。あたしの他に当然千乃ちゃんも呼ぶ訳だし？　二人分の指名料かかる訳だから一晩幾らになるんだろう？　それともまだ他にも女の子呼ぶ？」

といたずらっぽい笑みを浮かべた。すると指名客は

「うわ、俺今すげえドキッと来た。さっちゃんって不器用なようできて時々魔性だよな。本気出せば、絶対もつと売り上げ伸ばせるんだけどな」

と唸った。ホステスは、あらこの人ったら誤魔化したりしてずるいわと思いつつ、「そう？」と短く答えそして、あたしはいつだつて本気出してお客と会話してるのに、一体何がいけないんだろう？と考えながら、マスカラを丹念に縫った睫毛を伏せると、もう一度手首に巻きついたブレスレットを眺めたが、ミラーボールが卓上に落とす光の様が邪魔して、縫い付けられたアルファベットはあまり読み取れなかった。

「飲み屋に来るような男って、ホントに馬鹿だよな」

と言いながらホステスの元恋人は、ホステスの住まうアパートのドアを、内側からガチャリと閉めた。まだ朝の五時前だというのに元恋人は隣近所の住人をはばかりる事も無く、声高に見知らぬ男を非難した。

「そうでしょうか？ そう思うでしょうか？」

と答えながらホステスは、一人暮らしとは思えぬ程に多量の靴がごった返す玄関に、更にピンヒールを脱ぎ捨てると、キッチンを横切り、その奥手のワンルームの床に据えられたベージュのソファークロケットの上に腰を下ろした。ソファークロケットの周囲には、脱ぎ捨てられたパジャマやら、読みかけの雑誌やら、固まって出なくなったマニキュアの小瓶やらが、だらしなく散乱していた。

「あたしは理論的に、人肉が美味しいと思えない理由を言ってるのに、あの客は感情の問題だって決めつけてるんだよ。そんなんじや議論は平行線じゃん？ 人肉は美味しいと思うんなら、理論的に人肉が美味しい根拠を示せての」

「いや俺が言ってるのはそいつじゃなくて、末永とかいう男の事だよ」

「……え？」

話の腰を折られたホステスは、帰宅前に立ち寄ったコンビニで買った商品を、袋から取り出す手を思わず止めた。元恋人はホステスの脇から手を伸ばし、袋からライター詰め替え用のガスを取り出した。

部屋に着いたばかりだというのにもう吸うつもりなのか。ホステスが落胆していると、元恋人は

「宝くじの金で飲み屋に通い詰めるなんて、俺が今まで聞いた中で一番馬鹿馬鹿しい使い方だよ。そんなことするくらいならその金でその女買えばいいじゃねえか。別に三億じゃなくても一億もキャッシュで出せば、人生売る女だっているだろ」

とはき捨てる様につばやきながら、ホステスに背を向け、ガスを

入れるためのビニール袋を求めて、キッチンへと消えて行った。

一人ワンルームに残されたホステスは、出勤用のミニスカートのまま、ソファアームベッドの上にあぐらをかくと、コンビニの袋から取り出したカルビ弁当を咀嚼しつつ、自分は一億で未永に人生を売ることが出来るだろうかと、真剣に考え始めた。

例えキャッシュとはいえ、サラリーマンの生涯賃金に満たない額を積まれたところで、自分は人生を売ることが出来るだろうか。それとも千乃ちゃんだったらできるのだろうか。いやそもそも未永は、女の人生を買うことを望んでいるのだろうか。

だがそれを考え始めたのも束の間、元恋人が「酒じゃなくてさあ」と言いながら、再び部屋に入って来た。ホステスはゴムの様な歯ごたえのカルビをゴクンと飲み下すと、ワイズのパンツに包まれた脚を床に投げ出して、今、正にガスを吸わんとしている元恋人の姿を眺めた。

元恋人は、パンツと揃いのワイズのジャケットを羽織った上半身を壁にもたれると

「俺の大好きなクスリでもキメながら、女の子と楽しくイチャつける店があつたら、俺だつて行ってみたいよ。こんなチャライガスとかブロン液とかじゃなくてさあ。純度の高いダウン系のさあ」

とつぶやいてから、ビニール袋に顔を近付けた。ホステスは、そんなの飲み屋の客よりもつと始末が悪いと心の中でつぶやきながら、姿勢を正し、目の前の男のいつもの行為を凝視した。

透明な袋の向こう側で、必死に何かを体内に取り入れようとしている男の顔は醜悪だった。男の顔立ちがなまじ端正であればこそ、その行為と表情の変化は余計無様だった。だからこそホステスは目を凝らし、昔愛した男のなれの果てをその瞳に焼き付けようとした。

元恋人が投げ出した足先に当たって、未開封の缶ビールが、ガツンと音を立てて床に転がった。もし元恋人が酒の飲める体質だったなら、こんな愚かなジャンキーにならずに済んだのかも知れないと、ホステスは思った。

元恋人は、壁にもたれたまま瞳孔の開いた眼を宙に漂わせていたが、不意に

「ねえ、聞こえる？」

と真剣な面持ちで、ホステスに尋ねた。ホステスはシガレットケースからセーラムライトを取り出す手をピタリと止めると、しばらく黙って耳を澄ました。ドアの外で新聞配達員がホステスの部屋の前を素通りしていく足音が響き、そして消えていった。

「足音？」

「いや、声。聞こえない？」

元恋人のやや厚めの唇は締まり無く緩んでいた。幻聴か。ホステスは「聞こえないよ」と答えながら、元恋人を正面からしっかりと見据えた。

ある時はその声は

「もつと、幸子さちこを大事にしろ」

と 告げ、またある時はその声は

「幸子は、店で知り合った客とやりまくっている」

と告げるのだと言う。元恋人は今日は一体どんなお告げを受けているというのか。

時には冷酷に見える程の端正な顔立ちを自墮落に崩壊させながら、ありもしない声に耳を傾ける元恋人の姿を眺めつつ、ホステスは化粧の剥げかけたその顔に涙を宿した。こんなにもお喋り好きな自分を置き去りにして、ありもしない声に耳を傾ける元恋人の姿に、ホステスはたまらずに涙をこぼした。

「どうして、泣くの？」

元恋人は驚いた様な顔でホステスを見詰めた。ホステスは黙って泣き続けた。

「泣かないで」

元恋人はホステスを抱き寄せると、その小さな唇に舌を差し入れた。ヌルリとした生の人肉が、ホステスの口内でチロチロと蠢いた。これは人肉の踊り食いだ。振って湧いた観念に突如覚醒したホス

テスは、全神経を味覚へと集中させながら、舌の上を這い回る人肉を躍起になって味わおうとした。

これは食べ物として美味しいの？美味しくないの？

結論が出る前に、思わずホステスは元恋人の舌から身を引いた。

食物としての観念で見ている人肉が、己が意思により動き回る事実が何やら気持ち悪かった。けれど次の瞬間ホステスは元恋人の手を握り、「動かさないで」と静かに命じた。

「動かさないで。今この指を殺して。食品としてこの指をあたしに味わわせて」

元恋人は別段驚く様子も無く、ニヤリとした笑みを浮かべて同意を示した。ホステスはその乾いた人肉を、ゆつくりと口に頬張った。それは滑らかな指先だった。女の粘膜を始終撫で擦っている男の、ささくれ一つ無い滑らかで墮落した指先だった。ホステスは我を忘れてその指先をしゃぶった。ツイと先程の涙の残骸が、ホステスの口元に流れ落ちた。

「どんな味がする？」

「……しょっぱい」

「どんな肉だつて、塩気が無けりや食べたもんじゃないさ」

だからあなたはいつも、涙に休息を与えてくれないの？ あたしにこの肉を美味しく頂かせる為に？

瞳で問いかけるホステスに答えもせず、元恋人は右手をホステスの口内に差し入れたまま、唇をホステスの耳たぶに寄せ生温かい吐息を送った。その感触に、ホステスはすぐさま自分の食欲を元恋人の食欲の肯定へと転化させ、食卓代わりのソファ―ベッドの上に、その身を横たえた。

だからあなたはいつも、涙に休息を与えてくれないの？ あなたがこの肉を美味しく頂く為に？

固く閉じた瞼で問いを押し殺すホステスを味わおうと、元恋人の舌と指先は、首筋から鎖骨を巡りその下の乳房へと伸びていった。が、その周辺にはまだ邪魔な包装紙が、幾重にも渡って巻かれてい

た。

物言わぬ食物のように無言で包みを剥がされながら、ホステスはふと首を傾け、右腕に巻きついたブレスレットを眺めた。

「salt」。

カーテンの隙間から差し込む朝日が、その文字をくつきりと照らし、文字を囲むライNSTOONをキラキラと反射させていた。眩しさに耐えかねたホステスは、もう一度ゆっくりと、瞼を閉じた。

むかしむかし男と女は別々の国で暮らしていました。そのため男たちは、子供を産むことができずに困っていました。男の中には妊娠した者もいましたが、出産をすることができずに死んでしまいました。そのため男の国の王は、

「自分たちの子供を女たちに生ませるには、どうしたらいいだろうか？」

と家来に相談しました。するとある家来が言いました。

「わたしに木の実を干した物を、幾つか持たせて下さい」

家来は干した木の実を袋に入れると、はるばる旅をして女たちの国に辿り着きました。女たちは初めて見た男の姿に興味を持ち近寄って来ました。家来は女たちに言いました。

「わたしは女王様に貢物を持って参りました。どうか女王様へ、お目通りがかないますよう、お取り次ぎ下さい」

女たちに伴われ目の前に現れた男の国の家来に、女王は

「何の貢物を、持って来たのじゃ？」

と尋ねました。家来は

「わたしたちの先祖のペニスです。大変美味しい物ですからどうぞお召し上がり下さい」

と言つて、干した木の實を出しました。

女王は先祖のペニスを気に入り、あつという間に全部食べてしまいました。そして舌なめずりをしながら、家来に尋ねました。

「お前にも先祖たちのように、ペニスが付いているのか？」

「はい。付いております。けれど生きている人間のペニスは食べ方が違います」

「どう食べるのか？」

「こうするのです」

と言いながら家来は女王の上にまたがりました。女王は家来のペニスを食べながら

「何て美味しいのだろう。何て美味しいのだろう」

と叫びました。

行為が終わつた後、女王は

「お前のペニスはお前の先祖たちのペニスよりずっと美味しい。もう一度、お前のペニスを食べさせておくれ」

と要望しました。そこで家来は再度女王の上にまたがりました。

満足した女王は、残りの男たちもこの国に連れて来るよう家来に命じました。そこで男の国の男たちは皆が女の国に移り住むことになり、女たちは男たち達の子供を産むようになりました。

「何て美味しいのだろう。何て美味しいのだろう。お前のペニスは
お前の先祖たちのペニスよりずっと美味しい。もう一度、お前のペ
ニスを食べさせておくれ」

敢えて声に出してつぶやきながら、ホステスはソファアベッドの上で薄目を開けた。けれど西日の差す乱れた部屋の中に元恋人の姿は無かった。ホステスは溜息を吐きながら、半身を起こした。不意に思い出したアフリカの民話と人肉を食すことについての関連を、誰かと語りたかった。

その民話は、ホステスが中学生の頃、父親の書齋でたまたま見つ

けた書籍の中に、収録されていたものだった。牧師をしている父親の書齋には、「ホテル」や「シティーハンター」などの漫画本の他に、「レイプ」と題された不穏なノンフィクションものが、ほんの数日程、本棚の陰に隠されていることもあったが、大抵は溢れんばかりのキリスト教系書籍で埋め尽くされていた。

本棚の大半を占めるそれらの書籍は、大抵、年若いホステスの興味を惹くことはなかったが、しかしその書籍にはホステスの手が伸びた。それはアフリカ伝道に貢献した女性の記録だった。女を男より弱い器であるとするキリスト教思想に彩られたその部屋で、女性が活躍する書籍が存在することが、稀なことだった。

けれど年号や信者数の推移などが詳しく記された退屈な書籍は、ホステスの関心を捉えなかった。双子を呪われた存在とするアフリカ風習の元、ジャングルに捨てられた双子の赤ん坊を、女性伝道者が探しに行ったエピソードと、参考資料として挿入されたアフリカ民話以外は。

双子に呪いを見るアフリカ風習以上に、官能と共食いの観念が混じり合った不思議な民話に戦慄を覚えつつ読み進めたホステスは、読み終わると同時に、冒頭から再び、民話のページをめくった。まだ性経験の無かったホステスは、強い衝撃と共にその民話を脳裏に焼き付けた。

毎週日曜日ごとに、父親が講壇の上から発する数々の聖句が、望むと望まざるとに関わらず記憶されるのと同様に、ホステスはその民話を、ふとした拍子にこぼれ出る記憶の引き出しの中にしまいこんだ。

例えば

「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。自分のために刻んだ像を造りひれ付してはならない。あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。安息日を覚えてこれを聖とせよ。あなたの父と母を敬え。殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。隣人について偽証してはならない。隣人の家を

むさぼってはならない」

「『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところですよ。しかし、だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですので姦淫をしたのです」

「あなたがたは、地の塩です」

「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」

「あなたの敵を愛し、あなたを迫害する者のために祈りなさい」

「律法によらなければ、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、『むさぼってはならない』と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう」

などの聖句が放り込まれているのと同じ、記憶の引き出しに。

しかし礼拝に出る度に、そして義務感から聖書を読む度に、それらの聖句が引き出しから取り出されまた戻されたのとは対照的に、アフリカ民話は、取り出される機会の無いまま、引き出しの奥へ奥へと追いやられていった。

けれど十年以上の時を経て、その民話の記憶は引き出しの中で目を覚ました。ホステスはソファアベッドの上に座り込んだまま、懐かしい書籍に思いを馳せた。

その時テーブルの上で、携帯電話がぶるぶると身震いを始めた。

ホステスはパジャマの胸元を掻き合わせると腕を伸ばして携帯を掴んだ。だらしなく開いていた胸元が、先程の元恋人との情事の記憶を、ホステスの脳裏に蘇らせたが、液晶に浮かんだ「母親」の文字が、すぐさまその記憶を追いやった。ホステスは一瞬息を止めボタンを押すと、「もしもし」と低い声を出した。

「もしもし、お母さんだけど」

と言つて、ホステスの母親は一旦言葉を区切った。ホステスは「うん」と短く答えながら、布団の温もりと冷え切った室内の落差に身震いし、片手でソファアベッドの下に落ちていたカーディガンを掴んだ。

「なに、今日はバイトなの？」

娘はセブンイレブンで深夜のバイトをしていると信じる母親がそう尋ねると、携帯を耳と肩の間に挟み、器用にカーディガンを羽織りながらホステスは

「うん。七時からね」

と実際の入りより、一時間早い時刻を告げた。そうすれば少しでも早く電話を切ることができるとホステスは考えた。

すると母親は

「そうじゃあ、簡単に話すけど……」

と前置きをして、最近体調が悪いことや、家族や身内や近隣の住人の愚痴などを、要領を得ない話法で語り始めた。

この人はいつも自分の話ばかりで、あたしの話は聞こうともしない。そう考えながらホステスは、まるで母親思いの娘のように熱心に相槌を打ちながら母親の愚痴に付き合った。

四十分程経った頃、突然母親は

「あらやだ。もうこんな時間だわ。夕飯の支度しないと」

と素っ頓狂な声をあげた。ホステスはやれやれこれやっと解放されると安堵したが、ふと思いついて

「ねえ、お母さん」

と呼びかけた。

「何？」

「お母さんは、牧師室にあったアフリカ伝道の本で知ってる？」

ホステスは頭の中でそうつぶやきながら、口では

「お母さんは、人肉って美味しいと思う？」

と尋ねた。父親の書齋にあったおびただしい数の書籍の中の、たった一冊の本のタイトルなど、電話口で確認できる訳がないことは分かっていた。

娘の問いかけに母親はしばし押し黙ったが、やがて

「そうねえ……。人は一番好きな人の肉と、一番嫌いな人の肉のどっちかを食べなきゃいけない場合、好きな人の肉を食べるものらしいわねえ。嫌いな人の肉っていうのは気持ち悪くて口にできないも

のらしいわよ」

とつぶやいた。答えになつてないよと思いつつホステスが「ふうん」と返事をする、母親は

「じゃ、もういい？ お母さん夕飯の支度あるから」

とガチャンと受話器を置いた。

しん、と室内に再びの静寂が戻つて来た。けれど暮れかけた部屋の空気は、先程よりもずっと痛切に冷え冷えと、ホステスの心身に迫つて来た。

ホステスはファンヒーターを点火すると、携帯をソファベッドの上に放り、自身をその隣に横たえた。そして

「何にせよ人つて勝手な生き物だわ。食べたりしたらその人消えちゃうのに、それでも嫌いな人を食べるのは、気持ち悪くてできないって言うんだから」

と敢えて声に出してつぶやくと、「うーん」と唸つて体を伸ばしたが、その時ソファベッドから飛び出した右足がゴミ箱を倒し、中のゴミを辺りに散乱させた。

ゴミの中には今朝方の、使用済みのスキンも含まれていた。ホステスはそれを親指と人差し指でそつとつまむと、カーテンの隙間から差し込む赤い夕陽にそれを染めさせた。

ふと

「あなたの父と母を敬え」

という聖句が脳裏に浮かんだ。精子を決してこんなゴムの袋に封じ込めなかった、あなたの父と母を敬え。精子を女の体内に注ぎ入れ、そして生まれ出たあなたを粗略に扱うあなたの父と母を敬え。隣人どころか敵どころか自分の子供すら愛せなくせに、ぬけぬけと牧師夫妻の座に着いている、あなたの父と母を敬え。

ホステスは脳裏に響く厭わしい声に反発する為、敢えて声に出して「何て美味しいのだろう。何て美味しいのだろう」

とつぶやいた。そしてこの精子を放つた元恋人のことを思った。

多分自分は、元恋人の肉なら食べることができのだろう。赤く

染まったスキンを眺めながら、ホステスはふと確信した。

「あ、いいよ。俺は」

とホステスの差し出したライターの火を断ると、傍らの新規客は、自分のジッポでクールに火を点け、それを酒瓶やら水差しやらでこつた返すテーブルの上に置いた。そのジッポには、親しみ深いくかがわしいキャラクターがデザインされていた。

「え、これペコちゃんのジッポ？」

ホステスは軽い驚きと共にそれを手に取った。ジッポを使う男はよく見かけるが、ペコちゃんデザインのものを見るのは初めてだった。加えて、縮れた短髪に口ひげというチンピラ風のこの新規客が、ペコちゃんをあしらったジッポを使っていることが意外だった。

その時テーブルの向かい側から、射る様な視線を受け、ホステスはジッポから視線を外すとすぐにそちらに目をやった。そこには目を三角に尖らせ、口を真一文字に結んだ男が座っていた。

何かに怒っているらしい。店が混み始めたため、ワンテーブルに一人しか女が着かなくなったことが気に入らないのだろうか？

ホステスはとりあえず、その新規客の友人にも気を配っていることを示すため、彼の前に置かれた吸殻入りの灰皿を新しい物と換えた。すると新規客の友人は、フリリップモリスを取り出し口にくわえた。試しにライターの火を差し出すと、彼は無表情にその火を受けた。

飲み屋での流儀が違う。よく見るとこの男は黒づくめの服装をしているのに、隣のチンピラはジャージ姿だ。服装の好みが違う。それに何より先程から二人の視線はほとんど絡んでいない。あまり仲の良くない二人だ。接客がやり辛い。

ホステスが警戒していると、隣のチンピラが

「微妙なペコちゃんだなと、思わん？」

と思わせぶりに尋ねた。ホステスはその問いかけに

「うん、何だか偽物ちつくー」

とつぶやきながら観察したが、すぐに

「あ、これミルキーじゃない。ミリーだ」

と小さく叫んだ。「milky」というロゴの下で、微妙なペコ

ちゃんは本気で舌を出していた。

「北京の、石景山遊園地を買って来た」

いかつい口ひげをたくわえた唇を緩めながら、チンピラはそう説明した。その時テーブルの脇を通りかかった中国人ボーイが、ぴくりと眉を動かし聞き耳を立てた。

オーナーは日本人であるものの、店長に中国人を据えているこの店には、中国人ホステス一人の他に、二人の中国人ボーイが働いていた。

ホステスは脇に佇む中国人ボーイに気付かずに

「うっそ、マジで？」

と笑いながらチラと向かいの黒づくめに視線を投げた。接客中のホステスにとっては、とりあえず今は、自分の着いているテーブルの客の機嫌が一番の関心事だった。

けれど黒づくめは相変わらず仏頂面だった。偽のデイズニーキャラクターのみならず、髭の縮れたキティーちゃんや、弱々しいドラえもんなどの着ぐるみにパレードをさせ、世界を騒がせた石景山遊園地をこの男は知らないのか。それともやはり機嫌が悪いのか。

ホステスが黒づくめの心境を図りかねていると、チンピラは黒づくめを気にもかけずに

「うっそ、屋台の射的で当たった」

とさっさと種明かしをした。それを聞いて中国人ボーイは、ようやくその場を立ち去った。

中国人ボーイがカウンターに戻ると、そこには使用済みのおしぼ

りが、山と積まれていた。隣に用意された洗濯済みおしぼりはもう残り少ない。

その時カウンターの下から、派手な付け爪を付けた手がぐいと伸び、数少ない洗濯済みおしぼりを一つかさらった。ナンバーワンの陽菜ひなだった。陽菜はカウンターの裏側でかがみ込んだまま胸元を開けると、パットで汗ばんだ乳房をおしぼりで手早く拭い、それを使用済みの山に投げ込みながら立ち上がると、ヒールを鳴らしつつ、指名客の待つテーブルへと向かって行った。

中国人ボーイはそれを冷やかな視線で見送ると、使用済みおしぼりの山を抱えて、洗濯場へ向かった。そしてそれを洗濯機に放り込むと洗剤を入れずに洗濯機を回し始めた。

さて中国人ボーイが立ち去った後、ホステスは黒づくめを見やりながら

「へえ、射的とかよくやるの？」

と尋ねた。一緒に来店している以上交流はあるということだから、チンピラの射的頻度を黒づくめに尋ねることは不自然ではないはずだった。あるいは黒づくめが、自分に向けられた質問と捉えて答えなくても構わないとホステスは考えた。けれど黒づくめは、ホステスを無視して、ひたすら煙を吐いていた。

「ミリーは、ママの味」

黒づくめが無視するのなら、いつそ今の質問は流そうとばかりにチンピラはいかつい口ひげをたくわえた唇で、節をつけて口ずさんだ。

その時甘つたるい味覚がホステスの口内に広がり、頭の中では、「ミルクィーは、ママの味」というCMソングが鳴り響いた。ホステスは

「あたしそのCMソング、嫌いだったんだ」

とつぶやくと、微妙なペコちゃんの描かれたジツポの蓋を、かちやかちやと開け閉めした。先程から全く口をきかない黒づくめへの苦手意識から、ホステスは隣のチンピラに心を開き始めていた。

「何で？」

「『ママの味』ってママの人肉の味なのかと思ってて、人肉味の飴なんて、気持ち悪いって思ってたの」

それでも滅多におやつというものを与えられない環境だったから、結局自分は、たまに顔見知りの大人に与えられるミルクィを、恐々と口にしていたと思い出しながら、ホステスが打ち明けると、黒づくめが「馬鹿じゃん」とはき捨てる様につぶやきながら、ようやく会話に加わってきた。その男の澀んだ瞳には、金で買った女に対する歪んだ優越感が、性欲の様なギラつきを持っていやらしく輝いていた。

今まで散々黙り込み、ガンだけ飛ばしまくっていた男が、やつとこさ口開いたと思っただらおっしゃる台詞がそれか。カチンときたホステスは黒づくめに向かって

「え、じゃあママの味ってママの何の味か子供の頃から知ってた？
と少し硬い声で尋ねた。

「知ってたよ」

「何の味？」

「ミルクの味だろ」

するとホステスは、傍らのチンピラを肘でつつきながら

「やだ、ちよつと照れてるよ。この人。『ミルクの味』だって。母乳ってはっきり言えばいいのにな」

と共犯者めいた声色でささやきかけた。ホステスは、壊れかけたものを壊すことには昔から罪悪感を覚えないタイプだった。

チンピラはすぐさまホステスの意向に乗り

「何だタカ、照れてんのかよ」

とホステスに加勢した。

「そうだよ。タカ君。『母乳』って言うのが恥ずかちいでちゆか？
いつもは『パイパイ』って言ってるから、よく分かんないでちゆか？」

「タカ、『母乳』だぞ。『母乳』。言ってみろ。全然恥ずかしいこ

とじゃないぞ。むしろいい歳して『パイパイ』なんて言ってる方が、ずっと恥ずかしいことなんだぞ」

先程の優越感を、即座に屈辱に転じつつ、顔を紅潮させる黒づくめを眺めながらホステスは、今夜末永が来ていたらまた怒られるところだったなあと冷や冷やしていた。

「客とつちめてどうすんの、さっちゃん。ム力つくのも分かるけど、ム力つく客やつつけてる力があつたら、指名客取る努力しなきゃ。さっちゃんはいつも頑張る方向間違ってるよ」

末永の言いそうな説教をあれこれと考えながら、それでもちよつとやり過ぎた気もして、とりあえず水割りを作つてやるうと、ホステスが黒づくめのグラスに手を伸ばすと、右手首に巻きついたビームスのプレスレットが、ぶらぶらと揺れた。

あたしは「milk」ではなく、「salet」を選んだ。

ホステスは安物の焼酎の蓋を開けると、黒づくめの為に、うんと濃い目の水割りを作り始めた。

「奈津さん、『剛史君が母乳飲んでくれない』なんて言つてたけど変ね。さっきお母さんがこっそり飲ませたら、凄い勢いで飲んだわよ」

「飲ませた?」
「お母さんのおっぱいよ。希実のそみの分が無くなつちゃうから慌てて止めさせたら、大声上げて泣き出すもんだから、奈津さん飛んで来ちゃつて、もうお母さん大慌てで胸しまつたんだから」

十歳下の妹の授乳中だった母親が、十六年前に自分に漏らしたエピソードを、何とはなしに思い出しながらホステスは、姿見に映つた自分の裸の胸部をぼんやりと眺めていた。

左右を転じた向こう側の世界にも、やはり母親譲りの控えめな乳房が、白く息づいている。けれど形状をそっくりそのまま受け継いだ訳ではない。小さな乳房との対比から乳首は大きく見えるけれど、母親のそれはホステスの比ではなかった。母親の乳首はずんぐりと大きく紫がかかった褐色で、毛穴の一つ一つが盛り上がり、お世辞にも美しい乳房とは言いかねた。

けれどホステスが、母親の乳房を冷ややかに思い出すのは、視覚の記憶だけによる訳ではなかった。ホステスは触覚の記憶を持っていなかった。物心ついた時には母親の乳房は二歳下の弟の忍しのぶのものだったし、その八年後には希実が誕生した。

希実きみに乳房を含ませながら母親は

「忍も飲んでみたい？」

と尋ねた。忍はうなずくと幼い妹への授乳が終わるのを待って、母親の乳房に吸い付いた。母親は開け放たれた襖に程近い畳の上に正座していたため、膝立ちした忍の足は板張りの廊下にはみ出した。幸子はその裸足の足裏を眺めながら、「どんな味？」と尋ねた。

忍は

「ちよつと生温いけど、結構美味しい」

と白く濡れた唇で嬉しそうに答えた。母親は満足げにうなずくと、今度は幸子に向かつて

「幸子も、飲んでみる？」

と持ちかけた。

「あたしは、いい」

幸子は断ると、母親が出産前に念のためにと購入した粉ミルクの缶を開け、スプーンですくって皿に移し始めた。その頃実家にあるおやつと言えばこればかりだった。よその家のようにちゃんとしたお菓子や果物を食べたかつたけれど、しかし湯で溶かずに、そのまま口に運ぶ粉ミルクは、案外甘みな味がした。

母親はその一重の目に屈辱と失望の入り混じった色を浮かべた。そしてその一週間後、夫の実家で義妹の目を盗み剛史の口に自分の乳

房を含ませ、その成果を、得意げに幸子に告げた。

「きつと奈津さんの母乳は美味しくないのね。粉ミルクばかりで
剛史君が可哀想」

と勝ち誇った口調で。

ホステスはラメの入ったマニキュアが塗られた尖った爪先で、ちよんと自分の乳首を弾いた。乳首は素早くくるんと一回転すると、何事も無かったかの様に、再び元の位置に鎮座した。

母親程ではないけれど、メラニン色素が濃い気がする。誰に指摘された訳ではないけれど、肌が白い分乳首の色が目立っているような気がする。惚れた弱みで執着してくれた男も過去にはいたとはいえ、結局最後まで男を引き止めはしなかったつましい乳房。

ホステスは姿見の前を離れると、浴室のドアをガチャリと開けた。バスタブの中には先程溜めたばかりの湯が、もうもうと湯煙を上げながらたたえられていた。入浴剤を投げ込むと、みるみるうちに中の湯は乳白色に変化した。

まるで母乳か、精液の色みたいだ。ホステスは湯に身を沈めるとゆっくりと湯にたゆたった。

人は美しくない乳房を持つと、排出する体液に、価値を見出そうとする様になるものなのかしら？ それとも美醜とは別に、人は自分の排出する体液を他者の体内に投入したいものなのかしら？ それは自分を食べて欲しいということ、美味しさを認めて欲しいということなのかしら？

「生きている人間のペニスには食べ方が違います」

「何て美味しいのだろう。何て美味しいのだろう」

アフリカ民話の一節を思い起こしながら、ホステスが湯に浸っていると、不意にチンピラが口ずさんだフレーズが、ホステスの耳元によみがえった。

「ミリーは、ママの味」

あの後、黒づくめに対する敵愾心からあのジッポをねだってみたら、チンピラはいとも簡単にそれをホステスの手に握らせた。だから

ら微妙なペコちゃんは、ホステスの部屋のテーブルの上で、今も舌を出し続けている。

偽物を歌ったそのフレーズが、そして偽物を描いたあのジツポこそが、きつと今のあたしにはふさわしいのだろう。だからそれは易々と手に入ってしまった。そう思いながらホステスは、乳白色の湯に透ける乳房に視線を落とした。

放つべき体液を持たない貧弱なその胸は、例えようの無い存在の軽さでもって、湯の中をぼんやりと浮遊していた。

「ねえ、自分のピークっていつ頃だった？」

開店後間もない時間帯の、待機席で交わされるホステス同士の会話の中で、発せられたその質問に、千乃は

「保育園の時、『白雪姫』の劇で主役をやった時かな」とニツコリと笑った。

二十歳の千乃は、透き通る様に白い肌を持った可愛らしい顔立ちの女で、客の人気も高かったから、そんな彼女が、保育園時代をピクだったと話すのはいささか不思議な気もしたが、しかし両親の経営する弁当屋の営業不振によって短大を中退し、昼間は無償で作業手伝いを行っている彼女にとって、「貧困」という概念を理解しないまま、お姫様を演じることのできた幼少時代を懐かしむのは、当然のことかも知れない。

そう考えながら、ホステスは幼い千乃の白雪姫姿を想像した。それは今と変わらない邪気の無い笑顔でちょこまかと動き回る、おしやまな姫君だった。

「うっそ、わたしなんて白雪姫の母親やったよ」

そのか園加という鷲鼻の女が自嘲的につぶやいた。皆はその発言に、色

めきたつてささやき合った。

「怖いねー。白雪姫を毒林檎で殺そうとする継母の役だよ」

「っーか、原作は継母じゃなくて実母らしいよ」

「だったら益々ヤバいじゃん。猪の心臓を娘の心臓と思い込んで、料理して食べちゃう母親の役だよ」

「園加似合うよねー。保育園児の頃からメーカーキャップ無しでいけそうだね」

勝手な意見をさえずり合う女たちに、とうとう園加は

「あーもう、うるさい」

と怒った振りをして、わざとむくれて見せた。その時ホステスはふと、

「人は一番好きな人の肉と、一番嫌いな人の肉のどっちかを食べなきゃいけない場合、好きな人の肉を食べるものらしいわねえ」

という母親の台詞を思い出した。

白雪姫は王子と結婚した後、母親を舞踏会に呼び出し、燃える鉄の靴を履かせ死ぬまで踊り続けさせたが、しかし母親の肉を食べようとはしなかった。けれど母親は猪の心臓を娘の心臓だと信じて食べきった。

ホステスは千乃に視線を向けた。今時珍しく、カラーリングが施されていない艶のある黒髪を高々と結び上げた千乃は、ホステスの視線に気付くと、それを黒檀のように黒く深い瞳で捉え血色の良い頬を緩めると、血のように赤い唇を持ち上げ、ハツとする程妖艶に微笑んだ。

「何か、あるの?」

と女友達が背後から訝しげに声をかけた。ホステスはしゃがんだ

まま振り向くと

「カマキリの卵」

と答えた。

「うわ、キモッ」

女友達は顎の辺りで切りそろえたボブを微かに振ると、眉間に深く皺を寄せた。久し振りに夕飯を共にしようと、新規オープンのレストランに来たというのに、駐車場脇の草むらでカマキリの卵を発見し、トレンチコート裾が地面に触れるのも厭わず、わざわざしやがみ込むホステスが、女友達には何とも酔狂に思えた。

「カマキリの卵、嫌い？」

「卵も、カマキリ自体も嫌い」

「あたしもだよ。卵もカマキリもキシヨいよねえ」

そう言いながらもホステスは、地面から突き出た小枝に張り付いている卵を、好奇心旺盛な子供のような熱心さで凝視し続けた。それは不気味な色を帯びた卵莢らんけいに包まれて、やがて訪れる冬を待ち構えていた。

しびれを切らした女友達は、華奢なヒールの付いたロングブーツの足先で、地面に降り積もった枯れ葉を、軽く蹴飛ばしながら

「嫌いな物を、何でそんなに一生懸命見てんのよ？」

と苛立った声を出した。虫たちの声もか細くなり始めた晩秋の宵に、冷え冷えとした駐車場に長居する趣味は女友達には無かった。

けれどホステスはしやがみ込んだ姿勢のまま

「だって、嫌いなものって気にならない？」

と丹念にマスカラを重ねた睫毛で縁取られた瞳で、上目遣いに尋ね返した。すると女友達は、ブーツの動きをピタリと止め

「それもそうね」

と納得したが、ホステスは立ち上がり、「行こうか？」とプレスレットの巻き付いた腕を伸ばし、レストランの扉を指した。

レストランに入り注文を済ませると、ホステスは

「トシリンも、嫌いなものって気になる？」

と嬉しげに尋ねながらおしぼりの袋を開けた。その時強い塩素臭が漂い、ホステスは形良く尖った鼻先をおしぼりに近付けると、くんくんと臭いを嗅いだ。ホステスは塩素の臭いが嫌いだったからこそ、気になってわざわざ臭いを嗅いだ。

女友達はホステスの行為は気にせず、ホステスの問いかけに対して、「気になるね」とつぶやくと、

「わたし高校の時、大っ嫌いな男子がいてさ」

と昔話を始めようとした。ホステスはいつも通りのフルメイクの顔を上げ、「うん」と相槌を打った。

「とにかくもう生理的に嫌いで、顔も声も存在も何もかもが嫌な訳だから席替えとかがあると、好きな男子よりもそいつの席がどこになったかの方が気になって、真っ先にそつちをチェックしてたよ。もう毎日毎日そいつのことばっか考えてて、まるで恋してるみたいだった。でも全然恋じゃないの。卒業してもう二度とそいつと顔合わす必要が無くなった時、心底やったーって思ったもん」

「分かるよ。あたしだってカマキリの卵がこの世から無くなれば、どんなにいいかと思うのに、あると見ちゃうもん」

「カマキリもそうだけど卵ってホントキモいよね。触ったことないけど、質感が亀頭っぽいっていうか」

虫も殺さないようなおとなしげな顔を歪めながら、とんでもない発想を口にする女友達が何とも面白く、ホステスはわざと

「亀頭を、触ったことないの？」

ととぼけてみせた。

「違うよ。卵の方。ああ、カマキリの卵みたいな亀頭生やしてるなんて、最早男もキモい」

「触ってるくせに」

ホステスがニヤニヤしながら答えた時、糊の利いたエプロンを、きりりと締めたウエイターが、しずしずとスープと前菜を運んで来た。二人は夕飯を取りながらのんびりと会話を始めた。

琥珀色のスープをすくいながら、女友達は

「でも人間の亀頭に似てんのも、因果なもんよね」

とつぶやきながら、女雛の様な切れ長の目を伏せて、スプーンの中で揺らぐ液体を眺めた。女友達はスープの薄味が気に入らずあまり食が進んでいなかった。

「何が？」

「カマキリの雌って、交尾の後に雄を食べちゃうじゃん？ そうして産んだ卵が人間の雄の亀頭に似てるのって、何か因果な感じしない？」

「え、カマキリの雌って雄を食べちゃうの？ 何で？」

「栄養つける為らしいけど」

結構有名な話なんだけどなあと思いつつ女友達が答えると、ホステスは

「栄養つくの？ 同じDNAなのに？ 消化できるの？」

と興奮しながら質問した。

「どうしたのよ？ 一体」

呆れ顔で尋ねる女友達に、ホステスは一連の経緯を伝え始めた。

店に人肉美味論者が来たこと。似通ったDNAを持った物は消化できないという説から、消化できない物は美味ではないのではないかと疑問を投げかけたが、感情の問題だと一蹴されたこと。

そのやりとりを指名客に聞かれ、そんなことに熱くなるなど注意されたこと。

その話を元恋人にしたところ、元恋人は、人肉とは無関係の見地から指名客を馬鹿にしたこと。

その後アフリカの民話を思い出し、その民話と、人肉を食すことについての関連に思いを馳せたこと。

母親に人肉は美味しいと思うかと尋ねたところ、関係があるようではないような返答をされたこと。

子供の頃、不二家のCMソングの意味を誤解していたこと。

人が、自分の排出する体液を他者の体内に投入したがるのは、自分を食べて欲しいという願いの一つだろうかと思いついたこと。

店で出た「白雪姫」の話題により、母親の関係のあるようで無いような返答を想起したこと。

かいつまんでそれらの話を報告すると、ホステスは「だからさカマキリが栄養つける為に共食いをするんなら、人間も共食いで、栄養がつくってことなのかなと思っただの」

と言っ言葉を区切ると、長話の間に、とうにテーブルに運ばれていた白身魚のムニエルに、ようやく手をつけ始めた。それは食されることに待ちくたびれ、とうに冷めきっていたが、ホステスは構わず口に頬張った。

一方聞き役に徹しながら料理を堪能していた女友達は、スープを残して、あらかた食べ終わっていたが、彼女はナイフとフォークを握ったまま

「今の話聞いて、一番思っただことはさ」

と言いかけた。ホステスはムニエルを咀嚼しながら無言でうなずき続きを促した。そこで女友達は、ようやくナイフとフォークを皿の上に置くと

「サチリンさあ。何でまだ元彼と続いてんの？ 何でヤツたりしてんのよ？」

と不機嫌な声を出した。話の思わぬ展開に、ホステスが慌ててムニエルをごくと飲み下すと、女友達はホステスの返事を待たずに「そんなクスリとかヤツてる奴と関わってたら危ないじゃん。せつかく別れたのに、その後たった三ヶ月とはいえ一旦は彼氏だつてつくったのに、何でまだ関わってる訳？ つーか確かに宝くじの金をホステスに注ぎ込む様な男は馬鹿だけどさ、サチリンの元彼に、馬鹿にする資格ある訳？ 『目クソ鼻クソを笑う』どころか、鼻クソが目クソを笑ってるじゃん」と息巻いた。

「……あの人、父親が黄綬褒章受けたから、自分はニートのくせして芸術家気取りなんだよね。だから『感性を刺激するため』とか何とか言っマリアファナとかヤツてただけど、ニートだからいかん

せん金が無くて、最近ライターのがすとか吸ってんだけど、まあ二トで金無いから、その内ガスも買えなくなるんじゃないかなあ？」

そのガス代を、最近たかられ始めていることは伏せてホステスは答えた。高額なマリファナ代をたかろうとしないだけ、元恋人はホステスにとって誠実に思えた。

「芸術家？ ばっかじゃないの？ クスリで刺激しなきゃ使い物にならない感性なんて、どういじくろうが所詮凡人の感性なんだよ。自分は鷹に産み落とされた鼻クソだって自覚して、クソして寝りゃあいいのよ」

大人ばかりのレストランでは、いささか不似合いな程の大声をあげながら、自分の元恋人を罵る女友達を眺めつつホステスは、人肉の味とDNAの話はどうなっっちゃったんだろう？ とガツカリした。最早ホステスにとっては、飲み屋の客も元恋人も母親も女友達も、話の趣旨を無視して好き勝手な話題を繰り返すという点では、何の差異も無かった。

「僕は、友人に忠告をするのは大変いいことだと思う」

分厚い18金のマリッジリングをはめた左手で、灰皿を手元に引き寄せながら、夫は低く静かな声でつぶやいた。対面に座した妻は、ブラウンのアイシャドーを塗りこんだ目元でチラリと夫の動きを見やると、「そうね」と無表情に同意した。

「こと恋愛絡みの忠告は、それも異性関係の清算の勧めというものは、口に出し辛いものだよ。忠告が正しければこそ忠告された側は相手を恨むものだからね。人間は誰でも自分が可愛い。よかれと思つてした忠告により、相手に恨まれるなんて馬鹿げた事態を誰が引

き起こしたいものか。だがだからこそ、相手に恨まれるのを承知で忠告するという行為には価値がある。そうだろうか？」

そこで夫は言葉を切ると、キャビンをくわえ、金色のライターを握り、カチリと火を点けた。炎が上がる僅かな瞬間のみにきらめく美しい火花を瞳の端で捉えながら、妻は「そうね」と再び同意した。

「しかし彼女の発言は、レストランに於いてはふさわしいものと言えるだろうか？ 『クソして寝りゃあいい』なんていう発言は？

いやそれだけじゃない。目クソ。鼻クソ。カマキリに亀頭。交尾に共食い。こんな単語が、食事を楽しむためのレストランで発せられるにふさわしいか？ 連れの女にしたってそうだ。人肉が美味いか不味いか。ミルキーはママの人肉の味。人は排出する体液を他者の体内に投入したがつている。娘の心臓だと思ひ込み猪の心臓を食らった母親。こんな話題が、食事を楽しむためのレストランで交わされるのがふさわしいか？ ああ何の因果で僕たちは、あんな常識な女たちの隣のテーブルに通されてしまったんだろう？」

段々と早口になりながら、それでも低く静かな声量を保ったまま一気に言い放つと、夫は深々とキャビンの煙を吸い込み吐き出した。その煙の行方を目で追いながら妻は、「わたしも、そう思うわ」と同意した。

「だが嘆いていても始まらない。問題が起きたのなら解決策を探らなければね。ただそうはいっても、僕は彼女たちの友人じゃあない。従って恨まれるのを承知で忠告をするなんていう選択肢は選び得ない訳だ。何と言つても今は物騒な時代だからね」

キャビンを二口吸ったことにより、にわかに落ち着きを取り戻した夫は、ヤニで薄黄色くなった歯を覗かせながら、先程よりペースを落として話し始めた。妻は夫の指の間に挟まれた吸い差しのキャビンに視線を投げながら、「まあね」と同意した。

「そこで僕はこの一件を新聞に投書しようと思う。食事を楽しむ場では、その場にいる他の人間たちのために、場にふさわしい話題を選ばべきだと提案するんだ。何ととってもこれは人として守るべき

マナーだからね。こういつたことは、気付いた人間が問題提起して
いかなければならないと僕は思う。これは自分のためだけではなく、
世の中のためなんだ。気付いていながら見なかった振りをするのは、
いじめを見て見ぬ振りをするあざとさにつながるからね。何かに気
付いた人間は、その時考えられる最も賢いやり方で、問題解決に努
力する義務があるんだ。違うかい？」

紫煙をくゆらせながら力説する夫に、妻は「あなたの言う通りよ」と同意した。

従順な妻の受け答えに夫は満足そうに微笑むと、キャビンをもみ消し、二本目に点火した。シュツと音を立てて、再び火花が美しくきらめくの見届けると、妻は「ねえ、あなた」と甘い声を出した。思う存分自説を展開し、ようやく女二人組への苛立ちを落ち着かせていた夫は、優しげな眼差しを妻に投げ無言で発言の続きを促した。妻はそこで初めて、自分の表情に微笑みを取り入れると

「その投書には、例え喫煙席に座った場合でも、相席の人間の食事が終わらない内は煙草をたしなむべきではないという一文も、入れて下さらないかしら？ 料理の味と香りを楽しむレストランで煙草の臭いがかがされるのは、とても不愉快なんですよ」

と言いながら、ナイフとフォークをカチャリと置いた。その時妻の左薬指の華奢なプラチナリングがカチリと小さな音を立て、上気したうなじから、強い香水の匂いが立ち上った。

「『その投書には、料理の味と香りを楽しむ場には、きつい香水を付けて行くべきではないという一文も、入れて下さらないかしら？』って提案して来ようかしら？」

と小声でつぶやくと、女小説家は、赤ん坊のように関節の肉が陥

没した手を伸ばし、わざとらしく鼻を覆った。その様は豚が今初めて自分の鼻の存在に気付いたしぐさのようで、滑稽だった。

「はっ？ 何ですか？」

襟元に黒い染みを飛ばしていることにも気付かずに、夢中でイカ墨のパススタをすすっていた編集者は、慌てて皿から顔を上げた。女小説家は

「ああ、いいの」

と制すると、傍らのトートバッグの中から大学ノートを取り出し、ボールペンで「人肉の味」と大きく書き殴った。

「人肉の味。人間とは自分のことを棚に上げて他者を批判したがる生き物。そんな生き物を食べたところで、安っぽい批判精神の味があるだけだろう。まあ食えたものではないでしょうね」

ネタ帳にダラダラと、独りよがりな観念論を書き連ねる女小説家の脇に、糊の利いたエプロンを、きりりと締めたウエイターが立った。そして

「ワイン豚のソテーでございます」

と言いながら、湯気の立った皿を女小説家の前に置いた。

ウエイターが立ち去ると同時に、今度はホステスがそのテーブルの側を通りかかった。「クソして寝りゃあいいのよ」と言い放った後、自分がクソをしたくなって、トイレに立った女友達と入れ替わりに、トイレに向かおうとしていたのだ。通りがかりにホステスは、豚のように太った女小説家の元に運ばれて来た豚肉を見て、ただでさえ大きな瞳を更に見開いてから、カツカツとヒールの音を立てつつ通り過ぎた。

トイレの個室に入り、便座に腰掛けたホステスは、先程見かけた女小説家と豚肉の構図を脳裏に浮かべながら、用を足し始めた。

最初は、皮下脂肪だけで一年は生きてゆけそうな女が、この上なせ故脂肪を身につけるのかを不思議に思った。

次に、今は確かに豚肉であり、イスラム教徒とベジタリアンでもない限り、大抵の人間が抵抗無く口にするであろう食物が、ひとた

び人間の体内に摂取されれば人肉となり、肉食人種でもない限り、大抵の人間が口にするのに抵抗を持つ物体になってしまうことに、今更ながらに驚きを覚えた。

最後に、いやあれも一種の共食いかも知れないと考えた。そして豚の仲間である猪の心臓を白雪姫の心臓と信じて食らった母親の話を思い出しながら、ホステスは立ち上がり、洗浄レバーを捻った。ホステスの放った体液は、渦に巻き込まれながら白い陶器の彼方へと遠のいて行った。

その頃ワイン豚の運ばれたテーブルでは、女小説家が今正にその肉を食らわんと、ナイフを入れていた。丈夫で味の良い豚にするために、甲州産白ワインを飲まされ育てられそして屠殺され美味しく調理された豚が、ゆっくりと切り刻まれる様子を眺めながら、編集者は

「そういえば以前、食肉加工業者に聞いたんですが、豚は人間に体温が近いから体にいいそうですね」

とイカ墨でお歯黒の様に黒ずんだ歯を覗かせながら、つぶやいた。

「あらそう。人間は自分に近い物を食べるのがいいっていう訳？」

ナイフを動かす手をピタリと止め女小説家が尋ねると、編集者は

「いや、そこまでは……」

と自信無さげに、うつむいた。

「人間の体温より低い動物の脂肪は、溶け辛いから、体によくないっていう考えは分かるわよ。でもじゃあ豚は死んだ後も生きていた頃の体温を保っている訳？ それとも生前の体温は、死後の体温変化も凌駕する価値があるという訳？」

「いや、そこまでは……」

再びうつむく編集者を眺めながら、女小説家は話の矛先を変えようと考えた。女小説家は別にこの年若の編集者をいじめたい訳ではなかった。そこで女小説家は

「まあいずれにせよ、わたし程ワイン豚が似合う女は、ざらにはいないわ。そう思わない？」

と尋ね傍らのワイングラスを高々と掲げた。見た目はバリケードだが、中身がデリケートなため、赤ワインを飲むと必ず吐いてしまう女小説家は、今夜も白ワインを選んでいたが、その姿は似合うどころかむしろワイン豚そのものだった。けれど編集者は、うつむいた姿勢のまま

「いや、それは何とも…」

と自信無さげに、つぶやいた。

「やっぱり所詮、団地は団地だよな」

と馬鹿にしたように言い捨てると、元恋人は踵を返し車に戻って行った。ホステスは振り向きざまにもう一度後方の町営団地を見やっただが、すぐに元恋人の後を追いつき、助手席に乗り込んだ。

シートにもたれながらホステスは、二ヶ月前に別れたバツイチ男が住まう町営団地を、勤務明けの早朝に、わざわざ元恋人と眺めに来た事実についてぼんやりと考えていた。自分も物好きだが、元恋人はもつと物好きだと思った。

付き合っていた頃は愛情だと思っていた。自分の過去の男たちの話を聞きたがるのは、愛情ゆえだと思っていた。けれど別れてからも、元恋人はホステスが恋した男たちの話を聞きたがった。それだけではなく全くの他人の男女交際の話まで聞きたがった。

そして元恋人は聖書の話も聞きたがった。クスリに溺れる罪悪感から、聖らかなものに触れたいのだろうか。だとしたらとうに信仰を捨てた身とはいえ、救いを求める人にきっかけを与えるのはやぶさかではない。そう思ったホステスは、乞われるままに二人だけの聖書勉強会を何度か開いた。

ある時、元恋人の心を非常に震わせる聖句が登場した。

「だれでも、情欲を抱いて女を見る者は、心の中すでに姦淫をしたのです」

その聖句を教えた数日後、元恋人は嬉しそうにホステスに告げた。「俺『妄姦』って言葉つくったんだ。仲間内で流行らせようと思つてさ。誰かがすれ違いざまに女を見てたら、『お前今、妄姦してたろ』とかつてさ」

元恋人が好んでいたのは快樂にまつわる話だった。だからホステスであれ他者であれ、セックスという快樂の介在する話になら、全て聞き耳を立てた。そして愛と禁欲を説くキリスト教ですら、元恋人は自分の快樂のために利用した。情欲をいだくことさえ姦淫罪に当たるなら尚のこと、二百人を超える女と情を交わした元恋人の罪は、例えようもない程重いと云えた。元恋人は自分の罪深さに愉悅の涙を流した。

「悪魔でも聖書を引くことができる。身勝手な目的にな」

その時ホステスは、高校生の頃に読んだ、シェークスピアの「ベニスの商人」を思い出した。聖書の記述にこじつけて、利息を取り立てることの正当性を弁じたた金貸しシャイロツク。彼の求めた利息はアントーニオの人肉だった。

ホステスは隣でハンドルを握る元恋人の顔を眺めた。元恋人の顔を覆う人肉は、放蕩の疲れから、目の下にどす黒いクマをつくっていた。けれどそのクマよりずっとどす黒い欲望が肉の欲が、その人肉の下に渦巻いていた。

「律法によらなければ、私は罪を知ることがなかったでしょう。律法が、『むさぼってはならない』と言わなかったら、私はむさぼりを知らなかったでしょう」

この聖句を初めて読んだ中学生の時、ホステスはこれを書いたパウロを軽蔑した。自分のむさぼりの罪を、パウロが律法に押し付けている様な気がした。

けれどパウロのその言葉は、そのまま隣の元恋人に当てはまった。もしキリストが、情欲をいだいて女を見ることさえも姦淫罪に当た

ると言わなければ、元恋人は妄姦という観念を知ることもなく、そのような造語をつくることもなく、その罪を楽しむこともなかっただろう。

神を恐れる人間にとっては、罪の観念を知るとは自身を律することにつながるが、神を恐れない人間にとっては、楽しみが増えるだけだ。丁度スリルを求めて万引きをする人間がいるのと同様に。もし万引きが犯罪でなければ、彼らは別のスリルを求めることだろう。

そんなことにも気付かず、少しでもこの人の抛り所になるならと乞われるままに聖書勉強会を開いていた自分の人の好きさを、ホステスはあざ笑った。信仰は捨てたものの、ホステスはキリスト教自体を憎んでいた訳ではなかった。もし両親がインチキな牧師夫妻でなければ、自分は信仰を捨てなかったかも知れない。そんな思いがあったからこそ、ホステスは乞われるままに、元恋人に聖書の解説を行っていた。

けれどその勉強会により、ホステスは元恋人の快樂の片棒を担ぐ結果になった。だからホステスは自分を利用した元恋人を心から憎んだ。だがホステスは何も言わなかった。いつからかホステスは元恋人にとって、意思を持たないただの人肉に成り下がっていた。

意思を持たない代わりに感覚を所有する人肉は尿意を催し、それを元恋人に告げた。元恋人は父親のセダンをひた走らせたが、窓ガラスには脱穀後の死んだ様に眠る田んぼや、そろそろ人が起きだした気配の漂うひなびた民家や、営業時間外のガソリンスタンドやらが映るのみで、トイレ利用に降り立てそうな場所は見当たらなかった。

元恋人は、アクセルを踏み込みながら

「お前と付き合ってた頃だったら、お前の尿だつて飲めたのにな」
と人肉の尿意解消に関するようで全く無い発言を漏らした。

けれど人肉は、その発言を、戸惑いと意地汚さの混じった気分で受け止めた。

例え愛ゆえでなくても、快樂の観点ゆえであろうとも、自分の排出する体液を飲むことのできた時期があったと告げられたことは、ぞくぞくする様な喜びを人肉に与えた。その喜びは、尿意解消の身体的快感と相まってどれ程の歡喜を自分に与えることだろうか？

けれど人肉は、実際に元恋人に自分の尿を飲ませたいとは思わなかった。実際に飲ませたところで、放尿時の身体的な快さが変わる訳ではないのだから、そのようなことを実践することは、人肉にとつては意味の無いことだった。ただ自分の体の一部を飲み込むことができた人間が存在したことに、人肉はほの暗い喜びと共に失望を覚えた。

実際には飲ませる気などさらさら無いのに、自分の尿を飲むことができた男の存在に、享樂的な気分を覚えたということは、自分も妄姦の罪を犯していることに他ならないことに、人肉は気付いていた。実際に今までに行つてきた情事以上に、今自分が感じた悅樂の方が、余程罪深いことのように人肉は思った。

けれどそれでいて人肉は、元恋人が、「付き合つてた頃だったら」と告げたことに失望した。もう自分の尿を飲むことのできない元恋人に、人肉は失望した。

そこで人肉は

「じゃあ、あたしの肉は？」

と上ずつた声を出した。

尿ではなく肉ならば、このイカれた男は「食べられる」と答えるのではないかと、人肉は期待した。元恋人の肉を食べられる自信があつた人肉はそう期待した。憎しみと相反する執着を自分に与え続ける元恋人など、いつそばりばりと噛み砕き飲み込んで、その存在を消してしまいたかつた。

もし消化できるなら、あたしの細胞にその姿を変えてあたしの意思通りに動くがいい。もし消化できないなら、あたしの体を通つてその姿を醜い排泄物に変え、消えてしまえばいい。便器の中であるが最後に見せる無様なダンスくらい觀察してあげるわ。

その時、道路脇にけばけばしい佇まいのラブホテルが現れた。元恋人は

「お前の肉なら、いつだって食べたい」

と卑猥な笑みを浮かべると、車をラブホテルの駐車場に乗り入れた。

質問の意味を取り違えられたことに気付いた人肉は、途端に不機嫌になり

「お金、あるの？」

と咎める様な声を出したが、のん気な元恋人は

「昨日パチンコで儲けたから、今日は幸子ちゃん感謝デー」

とさつさと車からキーを引き抜いた。付き合っていた頃から元恋人は、小金が入る度に、「幸子ちゃん感謝デー」と称してレストランやホテルに人肉を連れまわし、結局自分が、一番楽しんでいた。

「感謝デーが、どうしてラブホなのよ？」

「トイレ行きたいんだろ？ 排泄に何千円もかけてさしあげようなんて、幸子様相手だからこそだよ」

ついでにもう一つの排泄行為もしようって腹のくせにと思いつつも、結局、元恋人の排泄欲と、自分の排泄欲に押し切られて駐車場に降り立った人肉は、フロント脇のボードで元恋人が選ぶに任せた部屋に飛び込むと、真っ先にトイレに突入し便器に腰掛けた。

ガラス張りのトイレからは、その隣のやはりガラス張りの浴室が見て取れた。そして反対側には、その向こうに広がる寝室と、部屋の途中に据えられたソファーに腰掛ける元恋人の姿が見えた。

付き合っていた頃、当時恋人だった元恋人に、放尿を見せて欲しいと乞われたことがあった。ホステスは断ったが元恋人はしつこく食い下がった。そして

「トシリンだつて、きつと彼氏に見せてるよ。付き合い長いし」

とホステスの女友達の名を、引き合いに出した。

付き合いが長いからといって、放尿を見せているとは限らないと思っただが、確証の無い言い争いをするのがホステスは億劫だった。

そこでホステスは折れることにした。放尿を見せる恥ずかしさよりも、不毛な議論を呼ぶことの方が煩わしかった。女友達が恋人に放尿を見せていようといまいと、そんなことはどちらでも良いことだった。

あの日、ホステスの二つの膝小僧の間にあつた元恋人のねじれた視線は、今ガラス越しのソファアールの上で漂っていた。安っぽいビニールの張られた茶色いソファアールの上で、元恋人はラッキーストライクをくゆらせながら、人肉の排尿を遠巻きに眺めていた。

いやあれは、ラッキーストライクではないかも知れないと人肉は思った。遠目には分かり辛いですが、あれはマリファナかも知れない。「昨日パチンコで儲けた」と言っていたじゃないかと思った。けれどもそんなことはどうでも良いことのように思えた。

どうせ見られるなら、いっそ近くで観察された方が、まだ屈辱からは救われるような気がした。こんな風にガラス越しに観察されてはまるで見世物になったようだと思つた。人肉は思った。けれどそれでもいいことのように思えた。というより、何もかもがどうでもいいことのような気がした。

人肉の味も、栄養の吸収も、誰にも話を聞いてもらえないことも、母親に愛されていないことも、母親の愛を乞いつつも実は自分も最早決して母親を愛せないだろうことも、乳首の色も、元恋人との腐れ縁も、元恋人に聖書を悪用させてしまったことも、自分が元恋人と同じ穴のムジナだということも、心配してくれている女友達を呆れさせていることも、もういい歳だということも、合わない仕事をしていることも、何もかもどうでも良いことのような気がした。自分が一塊の人肉に過ぎないということも。

便座から腰を上げショーツを引き上げながら振り返ると、塩辛い匂いが、便器から強く立ち上つた。体調が悪いのだろうか。人肉はレバーを引きながら、チラと便器内を一瞥した。

放たれ廃棄されるその液体は、放つた人肉自身より、ずっと生き生きした生命力を宿しながら、便器内でくるくると舞い踊りそして

消えていった。今の自分の放尿など一塊の人肉が体液をしみ出させているのと何ら変わらない。そう人肉は思った。

トイレから出ると、いつの間にもこちらに来ていたのか、元恋人が待ち構えていたかのように、プレスレットの巻き付いた人肉の腕を掴んだ。

今日は、そんな気になれないのに。

せめてシャワーを浴びてからにしたいのに。

そう思いながら人肉は元恋人の誘導に従い、椅子に腰掛けた元恋人の膝の上に、またがる様にして、腰を下ろした。

「そう、エキサイティングパブの女の子はそうやって客の上に座るんだ」

元恋人はそう説明しながら、墮落した指先を人肉の衣服に差し入れ、背中をゆつくりとまさぐり始めた。

イメクラの常連だということは知っていたけれど、この人は、エキサイティングパブにも行っているのか。一体何のためだろう？ イメージで遊びたがるこの人にとってはイメクラよりも退屈だろうに。

ひよつとしたら、あたしとエキサイティングパブごっこをして遊ぶためだろうか？ 放つものといったら体液のみで最早決して意思を放たないあたしなど、この人にとっては、自由に遊べる人肉に過ぎない。そう。牧師の娘というキーワードを持った人肉。これ以上無いほどの背徳感を男に与える、肉欲の人肉。

回らない頭であれこれと考えながらも、肉欲を刺激された人肉は、「ああ……」と小さく声を漏らし、両腕を元恋人の首裏に回すと頭を元恋人の肩にもたれた。その時閉じかけた瞳にぼんやりと、プレスレットの「salet」の文字が映った。

「あなたがたは、地の塩です」

脳裏にまるで幻聴の様にはつきりと、キリストの声が響いた。

幸子は閉じかけた瞳をカッと見開いた。正面の姿見の中に、放たれようとする意思を宿した人間の女が、もがいているのが見えた。

(後書き)

この作品は様々な意味で思い入れが強いので、ぜひ感想・評価を頂きたいです。

褒めて頂かなくても構いません。率直な反応お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6627t/>

人肉のお味

2011年5月29日22時25分発行